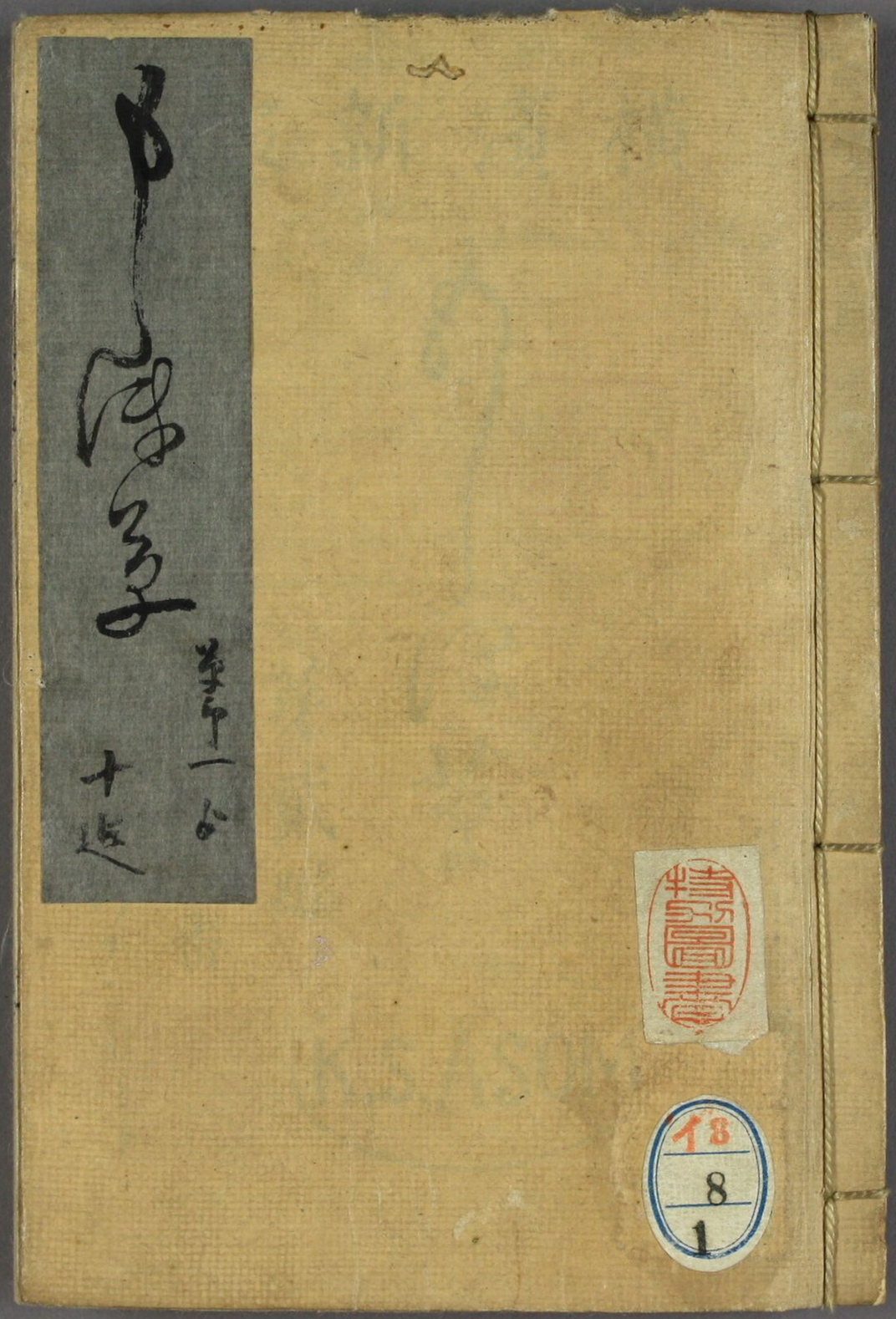
十返舎一九
18
8
1

横濱新報

めしほぐさ

第壹帙

Gaiji Zuroku
93
Vanreed

慶應四年戊辰閏四月十一日

めしほぐさ第一帙

曩ふヒコサウの新聞誌ありしがかの人此地を去りしのちいくばくもなくして其吏絶えうしふ去年正月我友人ベーリイ萬國新聞紙を板行せしがこれも第十篇迫出板しそやうぬ余深くこのこゝろをなぐさめておのくゝく新聞紙いとるべき有益のものなれど今ハ世界中文明の國ハこのあれる所國ハあらず然ふ日本ハそいまゞこの吏さうんふ行はるゝゆゑんい蓋し新聞紙の世ふ益ある事をあらふものまくるなれとこれを篇集をる人のこゝろふ學者ぶりてむづかしき支那文字まじりのこゝろいぬ文を用ゐる事と且ハ出板のおそくなりて時おくれ乃めづらしうらぬ評をうきのせるとこふよる

成るべく余が此度の新聞紙ハ日本國内の時くのさうさを勿論
アメリカ。フランス。イギリス。支那の上海香港より來る新報ハ即是
翻譯〳〵出たべく且月の内ふ十度の餘も出板たべくそを
諸色の相場をはじめ世間の奇事珍談ふるくさ紀事を加
めせる事ハ〳〵まと確實なる説を探めとあて決して浮説を
めせびとひねぶくハ諸君のおろく此新報を買ふんるを
○アメリカのワシントン。イギリスのロンドン。フランスのパリス其外
諸國の繁華なる地ハそれ新聞紙を出板せる處甚多し
日く出板せる家もつり二日め三日めに出板せるもありて一年
内出版の數幾億万といふとも尽くさるなり近來開け

たるハワイおても五六年前までハ島人大抵文字をもくぎり
〳〵に近日ハ追〻に〻らけて人〻文明ふ進み毎朝新聞紙を出
板せる事七千枚ふ至るといふ支那にても近來香港上海おて
漢文の新報を板行す大抵毎月二万四千枚を賣出たとい
是ハ皆新聞紙を買ふの人前以て週年の價金を板元(渡置て
出板ごふ新聞紙館より〻ぞ〻〻文明の國繁華の地ハて如此新聞
紙のさそんに流行せるとハ千里の外ふ奇談珍説坐ぐらは〻て見聞し
門を不出〻諸方の物價をもく人の智識をもく心志をたの〻ハ又ハ
商賈の便利を得るゑ其益ある事甚ある紀ぐらあるり余是故ふ日本
おても新聞紙の盛ふ流行せん事を願ふ也　九十三番　ウエンリート

昨日信州より帰りし商人の話に四月廿二日北部の
會津の兵、水戸、来名の兵をひきゐて信州の松代をふり
かへり城主さなだとのけあひふあらびしに三百年來徳川將
軍に屬し其恩を蒙りしを忘れて此度俄に南方の臣
下に屬せしは何事ぞやかりそめに南方は天子を狹で權威を
振ふあそこにてなるべくこころをあつめて北部に力
を合せ舊領安堵たるべしめざましく徳川家ゆゑ
かきたる御墨附をかくせとて厳しくけあひ居りしを
現在に見聞したきれりとぞ其後いつなりしか北部
の兵卒のいつゆへ松代をうまく説伏たりと夫より尾張へ

兵をさしむけ勢に乗じて京地に攻いらんとの志也とぞ猶
委しくさぐし求めく此次に出せべし會津より三越を説
伏しに皆此策を用ゐうとなん扨其人うすゐの關を通
しがたちうどめたる者四人こそきうて關守にもひく
いふ所なれば美濃の國大垣のりのなるゞ廿二日に宇都宮
の軍にうちまけて馬物具をもぶとられ辛うゞてこれをで
あげのびていつで此關をば通させたまへ切手をばのちゆゑど
こくそひかゞまりて居うり白紙ぎれなん一枚を着て上にぎと
いふものを引かりひるるもありしゝどそ
○下總のくにこゞの原に屯集せし北部の兵は皆江戸に

浪人なり植村某といふ人を使者とし て四月廿七日ふ南方の陣中へかけあひふ遣はせしに南軍より鉄砲ふて打殺しけるまで引続て両軍より砲發ふおよびつゐふ合戦となりしが南方の兵敗走のよし風聞あり南兵い彦根藤堂おろがるなり

閏四月三日舟橋合戦之事

徳川家旗下の士江戸をたちすき安房上總の邊ふ集居ころしゝの如何の評議ふ決しけるゝ四月廿二日のころ五百人ばかりの勢ふて日光山へとこころぎしてかゝ出しける途中舟橋駅ふ屯しゝ居こる上方勢ふろ兼て八幡市川邊を固居しゝ使者を以て速ふ降参せらるべきなりとかけあひふおろひしに關東方より衆議の上返答ふ可及の間両三日ふ待下さるべしとひのぐいしゝ閏四月朔日衆議一決の間いよゝ一戦いたすべきの趣使者を以ていひ入るしに上方勢ふろ一両日ひのくといひ出しころ同三日の暁天ふ關東方先手下総佐倉の城主堀田備中守。上総久留里の城主黒田豊前守并徳川旗下の人々惣勢三千餘人にて押出しゝ山ふせの小高處ふ大砲を打かけ鬨をぐつとあげてかゝるせたりしに上方勢いまぐ夜中の夢ふて眠り居こる處ふまづひとさゝもさゝ得ば備前藤堂をちゞめ我さきをとあけ出しちりくふなりて敗走しころそれ ばこぐろ一時ばかりふて吏をきるなりぬ關東

方手疵をおひし者只三人のこ上方勢死人凡三百八十人とぞ
同日四ツ時ごろ堀田の兵士なりとて五十人ばかりある農家に
立よりいとく渇しゝゆり水のみて茶のみあるまひられしとあり
けるバ忽ちあをせんどてきあるせる各血刀をひッさげ鉄砲を
もち中ゆへ切首をたづさへあるる有しがあひくとてふあまりて半
時ばかりも休息し居るふ市川ゆく只今合戦最中なりと
きて又舟橋ゆもたうひありとて黒烟さんふこちのぼり
是い打散されこる上方勢ふこゝび人數をまとめて押返しなり
とおのゝるゝぞいざ人こ走むろと一動して高名せんなどいさこ
きんで爰を立出市川の方ゆむかられしとぞ是い昨四日行德の

さる方よりまちもうり見聞しこる趣を報來まるもうり同日
九ツ時ごろ行德ふ居こりし筑前黒田の兵三百人ばかりゆく
八幡をさゝて操出しゝなを勝敗いまだつまびらかのあらず尚又
今朝の風聞ゆへ八幡の合戦ゆる上方勢ゆちひふ敗走し松戸駅
をさゝて落行しとぞ江戸よりも援兵として九州勢千七百人
ばかりとぞもむひけれども利根川のてゆくふ陣を取一人も川をこ
らず只關東勢と川を隔てゆゝあひて居るゝ是い深川邊
のさるこの千人の士昨四日市川邊迄見物ふ往こりし帰りきこり
てものこりなり扨市川舟橋八幡の駅ゝ人家不残ゆ焼ぬ
たりとぞん

○このたび王政復古ふつき舊弊を一洗あらせらるゝの趣を聞つるれらをもてゞめ各國の士商どもに目を括ひ足をそゞぐ新令のいろるをまちたるなり定めて舊來の汚習を掃清し文明なる法律を下しまべし舊政府の法律い拘束なるくして不便利なる吏のみを好んで何事によらずたゞ整吏をたをとゝ古の風いをとれふまつを好吏時を得くみづから暴威を振ひ種々の惡計を設て商賈をこまらせ以て自富の謀をなせり此等の吏尤ふくむべきの至りなり早く此弊を一洗して公明正大なる古の王政ふ復しまべし萬事簡便ふして差支なく貿易の出入日々に盛んふならば萬國の士商いのぶそひ來りて歳月を經るふ富強の國となるん吏竚立してまつべし

戸部の裁判所ふ目安箱を出して農商どもに民間の疾苦を述訴ることをゆるしまべふまつことをふそもその簡便なる法を貴びたまふことを知るべし

阿片烟の禁いかゞて外國との條約ふ乘せらるゝたれども今度まゝ嚴重の令を下しまべ多ひしいい我等の最敬服ふ堪えざる処なり阿片いあしきものとい知りながらいとゞ日本ふて斯嚴禁に為るゝどのあしき處を能知りたるゝものなるゝすくるし此故ふ今とに其大畧を記そべし阿片い天竺ふ産ぜる物ふて

イギリス人これを買ひ来りて支那の諸港へうりさばくことゆゑ毎年五万五千箱ばかりの一箱と付代洋銀五百枚左右なりこのの大毒物なるこれを吸へば次第くに精神をそこなひ色あをざめ力おとろへつゐに身なほどそこなはれたる一度此物を吸ちゞむれば力なくゆめるごとくあらべ〳〵やがる時に必速にその毒に酔うて死するとぞ夫故にこれを旅のそなへとして携へ行きて吸ふ者此物を高直なれば力と相應の身代の人ゆゑに段〻貧乏になりかゝる病人の如くゆゑ十分のちからきかなるべされども一日阿片を吸ふゆゑに居らまゝ家財衣服を賣尽し〳〵後ゆゑ田

地も家も賣て一片の畑となすものの支那人ゆゑいらぬこの知らぬほどなり人を救ふ事を説たまひし釋迦如來の本國より人を害し國を滅べき大毒物を生じ出せる事誠ふにのがれむべきなり或友人阿片畑の支那へ入津せし高を記したる帳面をもとゝに嘉慶元年より同治七年までの間に一億二十七萬五千箱なり時く直段の高下ありゝ此代洋銀幾億万枚なるべし支那國にて新大金を出して是を買ふとは其物にたちまち畑となりてのこるものなし其うへ人命を害し子孫を絶ふにいたるまでなれば始めのちとい支那國にても此事をふせぎとめんとて種〻心を労し厳禁を立るゞせし

あらざる一度ゑろまりし後ハ法のふやむことを近來ふ至り
ちい此禁なれのみをらば高位の人々も又是を愛するとゝや

本月四日のられぐふイギリス公使パークス并ふサトウ浪華
より出帆し七同六日下午本港ふ入れり京摂へとゝるべきあぐ
やうなるゝ一種〻新聞ゐれぐも此次ふ出だべし

浪華新聞第弐篇

慶應四年戊辰閏四月十七日

閏四月四日四點鐘英國公使パークス氏并譯官サトウ氏浪華ロ
より蒸氣船ふのり同六日八点鐘どろ横濱へとゝれる
天皇いやもろ浪華に行在し給ふ是ふとゝて大坂ハあるひふ繁
栄の體なり兵庫いさゝどゆきもひも甚ゝすふて外國人も大
坂へ開店しなるゝ結の方あほし〻京都ハ主上あるゝ故はるゝぐ
さぐ〻くなり〻といつりもぐて五畿内中國とゝにあぐゝなり

○浪華のはゝりうゝ

ときゞきゝられバあさろゞくさる そこぐあもぎふかびゞさに

○浪華新聞

四月十四日朝五ツ時ころより浪華元陸軍所にて調練あり諸侯
二十頭の兵士を悉く出して叡覧あらせらる一番に安藝新少將
織田出雲守市橋下總守士卒を下知し金鼓をならして志ざらく
綱錬たく引退るのハ二番に備前侍從北條相模守森對馬守
いりかゝりて人數を分て進退周旋の状をなし暫時ありて引退く
三番に德川元千代松浦肥前守池田摂津守四番に長門少將
加藤遠江守小出伊勢守五番に細川侍從津和野侍從柳澤
甲斐守六番嶋津淡路守毛利讃岐守七番に藤堂大学頭
松平圖書頭加藤能登守いづれも〳〵八ツ時過る迄終まで
是も〳〵と心をきそひて兵を練り武を講じて退散せり

主上竜顔うるわしく叡感あらせ給ふとぞ

○供奉の公卿より諸大名への下し文の写

今般蒼生塗炭の苦を被爲救度　御仁恤の　聖慮を以
御親征被仰出海軍　叡覧相済ひ上は關東の動静に依直に
太旆を東海道に被爲向ひ　叡慮にらせられ此度大總督より
形情言上の次第も有之先浪華に行在のさたに付て
供奉の輩下々に至る迄別て厚
恕を挾を公事を誤ひ類の儀決して
ゐ戮力協心可遂成功ひ尚倍從の者心得違無之様是又名其
家々において不洩様精々可相示事

一異変の節は各其持場を固くまもり持場無之者は厳
粛にして御指揮可相待はゐ〳〵猥ゐ奔走し混乱
を生じ或は持場を去り他の功を争ひは者は不覚
たるべき事
一平生道路往来いめも行軍たりとも礼儀
道を相譲礼を益〳〵無礼〳〵は者有之はは私ゐ争
論に不及其筋へ可訴出は是非曲直を正〳〵公平の
御處置可有之事
一軍中にあのゝは上下貴賤寝食労逸をあらのゝ
すべき事

一喧嘩口論かゝく禁止の事
一民屋町家ゐ立入乱妨狼藉いりちろん押借押賣ゐ
かゝく禁止の事
一遠乗或は歩行の節田畑をふみたゝらし農業をさまゝ
道ゝの竹木を折取は等の儀有之間敷事
一浮説流言すべく人心の疑惑を生じは儀かゝく禁止
自然難差置事件聞あるびはゐ速ゐ其筋へ可申出は
一猥ゐ酒會を催し醜態を顕〳〵は儀下々にはるまゝ心得
違無之様其主人へかゝく可申付事
一驛路旅店等にあのてゝぐりに忿怒を發〳〵小民を恐

怖せしめ候義有之ぎ〳〵敷事

一 貴ハ愛血を以て尊び賤ハ恭敬をもつて上下の間礼讓を專として非礼無之誠を推ハ儀肝要之事

右の條〻堅相守不心得之輩於有之者急度可相糺者也

戊辰 四月十五日

○諸州雜報

肥前の國なまくきにきりたんの者一揆をあとりたり是ハ法蘭西人のことをてをくるよりなり中國邊の脫走人ども おのゝ此内にくちたりて おのゝを三千人の餘 おのゝぶといふり

四月十七日奥州土湯越といふ處ふく合戰あり仙臺并ふ薩長の兵はぐふ三千七百餘人にて會津の兵とたゝかひが會津方勝利のよし仙台方てあひ死人あひたゞしく ありしとぞ

信州飯山の城を會津の兵とりあてて攻るこの松城より援兵を出して飯山を救ひけるば會津方敗走して越後へおぢこのりしとぞ

薩州より北陸道掃清の兵として蒸氣船ゐて兵丁を

越後路へはこりてたりときこゆ

○外國新聞

英國の女王その太子と新金山に遊びまひしに何者とも志まを草木のうげより鉄炮を打こみたるゞ太子にあたり命ゆいかくなるまでなれども甚あぶなかりし

○

アビシニヤといふ國に天竺ふちこの處ありその國の王近來はなはだ暴虐にして木の杭を人の腹にうちこみまたこの人をたぶこのふしてを地に伏せおきその上に鉄のくるまをおしあてゝしきりとせりその王も黒人なり

なる時エウロツパ人の種にて十六歳ばかりなる子どもを見るこゝろもちの白人の子なりあるきやつこのあとを牢へいれ〳〵とぞその子の曾て此王の危難を救ひし車にのる者なりよ〳〵惡行かくのごとき故此王外に出る時は百姓をもて奏走しくあげわらるゝとぞ

○

支那にて北京天津の近傍に捻匪回匪といふ兩賊あらはれて人數幾萬といふほどにおよびぬ國王よりたびたび追討使をさしもとめらるれどもさらにおとろかるゝけしきなく長毛賊とは別にして同類なり

○横濱近事

閏四月九日夜九ツ時ごろ嚴重の御備にて肥前侯江戸へゆきたるもの〳〵

同十日薩州因州藤堂の兵三百人ばかり上總の木更津より横濱へ来たり金川へも肥前大村の兵五百人ほど上陸したるよし十一日ようや江戸へ入りしとぞ

敗軍の残兵ちらば〳〵と噂せり

同十二日野毛町ふくきらをたるものあり官軍を誹謗したるゆゑとぞ

江戸の俳優澤村田之助去卯年九月脱疽を患ひ美國の名醫平文先生ふ療治をこしに右の脚を股の處より切とりてとふ藥をほどこしたるゆゑ枚そのこと死たるのすけの爲ふくに平文の國詩へ脚を注文せしが二三日前にとりつけのあしゝ一本ひのようにて来たり道きらちふあしゝ先ぬふ田之助よろこばしきぞ〳〵

但シ去三月中脚一本ゆゑ江戸の三舞臺をはらと閉じに繁昌なりしゝ色バ狂句ふ

ぶらいでもまたばかりもうが大ばかり　白主　不知

今朝余が知己より書状至来下総國行徳舟橋市川
八幡等の諸所に初めて西軍と關東脱走の兵と戰爭
おびゝ勝敗得失其微細なる新聞を得たるバ次編
に加へ近日出板せゞ

慶應四年戊辰閏四月廿九日

○條約

一外國交際は我皇國の興廢に關係する至大至重の事
件に付局中勤勞なる役々各同心協和長短相助確乎不
動の見識を持ち信義を外國に失せざるを旨趣とス

一局中一勤勞なるに各區分を定横濱箱館長崎神戸より
傳達往返する處の公用は其揖の役々是を專任し首尾
貫徹せるを要す故に混乱の憂ある事なし

一局中九時に出勤午後一時に退散す間一統勉強各精力
を勵し互に各般の諸事件を談論し自己の旨意を

満ざる者腹臓なく其件〻を説破し餘念を不可残り過失なる時ハ直ち悔改し敢て金言耳に逆ひ良藥口ち苦きの通弊を不可踏

右之通約束を定め其枝葉の如きハ互ち信實を盡し精細ち評議し第一我　皇朝の大典を以て根軸と成し宇内の通議に基き富強充實を海外ち延及せん事を希ふ

戊辰閏四月　　外國事務　小松帶刀　後藤象三郎

○閏四月五日御觸

江戸市中取締之義町奉行江　御仰被遊旨　大總督宮様ゟ被仰出ち間際勉勵可致旨　田安中納言殿ゟ被仰渡ち間取扱振之儀相伺ち品も有之ち得共右ハ追而御沙汰有之ち迄前〻之通相心得可申旨被仰渡ち付而者公事訴訟筋之儀者勿論都而武情ニ而不安之義有之ち間無御念月番之番所江可訴出ち御時節柄を憚り差控居ち族も有之趣相聞ち間右之旨町中不洩様早〻可相觸候

○滑耀先生日記の抄寫

戊辰四月七日下總國結城落城城主水野某官軍に屬し
たるを其子某江戸に在て此事を聞大に怒りたるも
三百年來德川氏の恩澤を蒙り今ぞ此期に臨て官
軍に從ふ事甚不義なり父なるべきに差置がたく
俄に合戰の用意を整へけるこゝに兵丁武器なども
けるべく德川家へ為て太砲數挺ならびに歩兵數百人
を借請即江戸を打立て父のこもりゐる本城をとり
かこみ大砲を打こゝに攻立るべく父城中に立籠て落
行ければ其子城に入りて三日なるに近きあるに

たるを居たる官軍此由を聞て不孝不忠の者なり
とて忽ちに切殺すべきなりとぞ
八日下野國壬生の城主鳥井某者なりて官軍に屬
せるの處今日官軍より使者を以て大砲を借請たき
よし掛合に及けるゆ早速兼引渡すべし砲術先生も
差添借渡すべしとぞ
九日官軍二百五六十人壬生より野州楡木鹿沼等の駅
を經て日光の方へ通行せり薩長ならびに彦根の
兵士なるべしとぞ
十日官軍二百餘人日光より二里南今市といふ所に

押寄たるべ日光奉行新庄右近將監出むとのひて何
等の義あく此處に差向いまたるぞ此處ハ德川家
の太祖の廟所にそなとと申けるべ元より東照宮へ
用事ありて差向たるあそいなり朝敵板倉伊賀守
なる者日光山ふかくに居るよし聞及ひつる間討ん
むとのひたるなりと答る間さらば暫く御待被下
べ某とくと穿鑿の上あらためて御わたし可申と
官軍ふるるに日光山ふかくりてるる
十一日日光奉行某ハ伊賀守をばひとるふ高原越の間道
より會津へあゆみてりて宗徒の家臣八人を以く

身代りとして官軍へ渡しるるとぞ
○今日關宿の兵官軍の先鋒として關東勢と岩井
といふ處ふく戦ひるこの關宿の兵衰切したりるるとぞ
官軍利を失ひるとぞ
十二日近日江戸旗下の士脱走してなちこちに屯集
するのはるるぐ多し種くの隊名なりて二百人或ハ三百
人より五六百人ふいるるもありとの風聞なり
十三日官軍今市を引退きて板倉ガ藩より八人の者
を宇都宮へ使ゆき城主戸田某ふなつけおれそれより
軍使を以く喜連川・大田原・丹羽等へ申通じるハ

會津へ攻入るべきの間速ふ人數をくり出さるべき也
とてなりなほいづれも兼諾の趣返答ふあるべしとのぞも
會津の兵安久津川の邊ふ充滿したるのよう風
聞なりしかれども兵卒を出すのなし
○今日栗橋のもとへ上あるく彰義隊の兵官軍の
糧船二艘を見付なりて陸地より鉄砲うちかけ忽ちな
二艘とる分捕おびただしそ
十四日常州笠間の兵卒三百人余官軍の命を受
野州宇都宮の援兵とし操出し栗橋驛ふて兵
糧焼ひかるをいなく彰義隊の兵驛もづまの変

田の中ふ埋伏して待居たるに案の如く笠間の兵卒
とりかこまれば打ひすまして打出しる鉄砲に
不意をとられて散々に成て敗北しけふう手
負死人もたくさんあるとそ
○今日德次郎にても合戦あるしと風聞なり
十五日江戸脱走の歩兵二百餘人東寧川を下り總道守
河岸より上陸して下妻陣屋の役人を説伏セ大砲壹挺
砲兵三十人金八百兩を借うけ夫より官軍の屯集したる
關本とつふ處へ押寄日の八ツ時ころより合戦はじまり
夕六ツ時過まで たくさんひしゃ關東方勝利ゆえ官軍ふ

竿間の兵多半討死したるよし

○此日小山とはだの間にて合戦ありしに官軍不利のよしにて江戸脱走の兵士二百八十五人分捕の武具或い首ちどたづさへ大平山へのぼりて一宿したりとぞ

○又下總の竹の原にて官軍と會津勢とたたかひしと風説ありし會津勢關宿をやぶりしともいふ

○又一手の關東勢絹川をわたりて入保田河岸より結城へ攻入りともいふ

右滑耀先生日記十六日より閏四月五日迄の處い第四編小出スベシ石橋小山合戦並宇都宮の戦爭甚ざ詳也

○

去ル十三日夕七ツ時頃相州箱根の下真鶴のそばへ蒸氣船三艘着岸し太不保加賀守江届いい徳川家脱走三百人乗込休泊いたしいふ相届ける故小田原より役人出張ところ雑兵平士とゆめてい凡三千人ばかり有之趣翌十四日町觸出ル由

歌ちがひ

むさし船のりしをいくさ州の第ニ　後人ふ和

雲のこなたを知るぞわびしら

○

こゝろよき第子蜂の巣を捉りて　寛徳
この夏蔭や引延されて文の姫　波岐
唐きものゝ白ひもそふや梅の花　弧梧
ちるをも何とかなめんもの秋庭　一粒
松ゝまゝ法ゝ寂てゐるは永代　雪舟
特色ひゝ法ゝ特の白い色之　観洲
わゝまるもぬるひとの情さ外　鹿ノ子

○滑耀先生日記のつゞき

十六日

朝五時ごろより會津兵と称しく百五十人ばかり結城へ打入り鉄砲をうちかけるまゝ官軍もも人數をゝり出し　たゝかひ會津兵おそれふ敗走しられば官軍勢に乗じて竹井村といふ處まで追掛まるゞ伏勢四方よりおこり立く鎗鋒をそろへて突くかゝるば官軍おそれふ狼狽しやう　やく一方をきりぬけて絹川をわたり関本といふ

處まぐみげめびてちりぐふちりたる士卒を
まとめちぐ〳〵いたをぎいるに陸軍隊の兵
みちのにあ〳〵せて一齊ふ鋏砲をうちこめまるれば
官軍ひとたまりもあるまじく敗走し歡喜院あるび
ふ名主七九郎ぐ宅其外民家ふ火をこのけてその
ひまに船主といふ處まぐあちのびしがちつこりも汗
戸脱走の兵ふ乘ることて又く絹川をこりて久保田
村ふ火をこのけ其まぐまじふ結城を通りぬる夜乃
五時ちぐふ小山の驛ふいりてやどりる

○十四日は栗橋ゆく敗軍したる官軍の手負死

人をけふ真壁の陣屋へちぐびるらぐ

十七日

きのふ打ちしたる井伊藤堂の兵ちちち
よりふ小山へたつまりる處ふ朝四時ごろ一番の關
東勢驛外まぐあしふ時の聲をたぐりたるひ
をいたぐけまい官兵ふりも鋏砲をうちかけて出ちて
たぐこのひけるぐ官軍ハ且たぐこのひ且退きまじバ
驛の東の麥畑の中まぐ追このけぬれて一時ぐりぐ
ほどたけ〳〵たぐこのひこりかるこころに壬生より
加勢の出〳〵まじぐ官軍是ふカを得てこえこりる

に八時過とあげ〳〵れたる東照宮の旗をあ〳〵立て關東勢あびくで〳〵しくあ〳〵きたりけれバ官軍大ふ敗走し木沢の人家へ火をこんりうくるとさるほどに大本城さ〳〵て逃かくるるそで壬生勢ハ先手の大將を打とるさるくひときくもさくへびあちめれるぶ石橋驛にてぶるもたり宇都宮さぐあちのびぶ倒ふ〳〵たる手負死人其数たるべくぶび扶關東方い夜五時ぶりに小山の宿ふ引かく〳〵く分捕し〳〵る品くを點檢〳〵るに錦の旗一流井伊家

白米二百俵　金四千五百兩　生捕十人　關東勢討死

数の旗二流　大砲十四挺　小筒七挺　鎗十七本　馬四疋

五十六人その内かく〳〵らだちたるの二人を葬ま手負を介抱ちどし〳〵そそるく朱度さのひけ是バちれ〳〵夜の内に宇都宮へ押寄く殘兵どもをあひちく〳〵さん〳〵く先さるれそぐ出けるぶ九ツ時とあぼ〳〵れころ關東勢のこふぶ小山を引ちくひく太平山へぞのぼりる

○今日東照宮の祭禮ちるまをさく德川家ぶ旧臣ぶ昨日生捕ちる井伊家の兵の首を切りて日光山へ持行く神前にそるくるるぞ

○今日仙臺なんびに薩長の兵と會津を打
ちく土湯越とのみ處まぐ出向しに會津より
防の兵を出しく嶮岨の間にたこのひるるが仙
臺勢敗走のよし風聞なり

十八日

きのふ討死なる官兵の死骸石橋と小山の間に
よこたへて算木をまねちぐしたるが如くなる
ものもあるとなくけふもそこまで
にいくさなるよし風聞しなり扨官軍宇都
宮ふ集りなきく諸方ふ居
なる關東勢ひそに襲撃の用意をぞなし
ありきなる

十九日

大平山ふ籠り居たる彰義隊貫義隊大久保
黨會津勢等其外諸家の脱走人都合三千七百
余人早朝より宇都宮城をとりかこ攻るが
そろべしたこのひふもなるべしこの鎮守明
神の社こく少し小高所なりれも彰義隊
の兵ども大砲數挺を其上に引あげて無二無三ふ
打立ゐ城の内外一圓ふ火焔となりく官

軍大ふ敗走し候ゆゑ城主戸田某も討死し候
ゆゑ又關東方へ降参致候由
二十日
昨日ゆふこゝに宇都宮落城し候由を關
東勢四千餘人夜の中に城へ入かゝりて東照宮
の旗日の丸の旗数十流あし立て候今や敵乃
寄せ来るものと待居申候に官軍は太半南
をさして落行候ときゝてさぶゝ[illegible]より
手生へ初て其罪をたゞすべし城にそ
守の兵をのこし九時ばかりに三千餘人まて
くり出し候
○きのふ生捕たる土州の參謀なるぶに彦根
手生の陣代の首をきりて獄門ふこゝ[illegible]ける
三百年来德川家の恩澤を蒙り候ゆゑ敵對
いたる者につき梟首ふ[illegible]ものあり
○廿一日より長い茅五篇に加へ引法き出板

○雜報

○八王子より きこえるこゝろの はるゝに驛のぎう
ぞくの榜示に 天朝御領 江川太郎左衛門支配所と
かきたるをみてたゝりけるを彰義隊の者どもあゝ
たゝりくけり
○十三四日のこゝろ 彰義隊のめめ三百六十人ばかり八王
子へいりこゝ驛の東西の口に關をすゑく西國武士
とあぼゝきものをえれべかくるゝなぎゝをうばひ
ゝりかををきりてあひやりまりたゞびとをときゞ
ゝくたゝめくゝたゝるぞ
○八王子の十人同心ども日光山の番に毎年五十人
ゆく六月朔日ゆくこゝろになる例あり此月初の頃
日光山を官軍にのりゝとられ八王子へふげかゝりきるゝ也て五十人のゝゝなるぞ
○このト七日ふゝらんすゝ ゝりふゝうの官人きゝれり十人の
モンテロー ひとりのバアセレーゝて 江戸家のあゝをこゝうあん
なるどの四ゝ なるゝものまりり
○横濱の集會所といふめのゝと 江戸家のこゝ好高ぞ
奸吏となれたひその好をほゝにまくに せんゝあにゝて
たる所ありこのゝ舊弊を一洗のぐせゝるゝゝうふ
なるゝばまゝのの所をぞもゝぐゝ 昨日其好魁

たる石炭屋多右衛門糸屋勘助芝屋祐次郎等を搦捕て裁判所の獄にとめらるとそ聞くこれまて日本の商人いほんとうのたるひをしたるものきゆゑに商法をもつぱらに私法をたてく中間或いかぶなとを称しこのきなひの世まくなるやうに心をめちるるありこれいあの道ぞりあて利を志めんとの好より起るゆゑはるそこはるそこおほやまあるなるぬるのりをいをひ王政御一新の時かのひてかる汚習をのぞきひるべらのおほみくふに繁栄の基なるべしと西洋の人こころとひ

横濱新報　慶應四年戊辰閏四月廿四日　第五篇

○滑耀先生日記のつゞき

二十一日

關東勢三千餘人にて王生城をとりかここ軍使を以て譜代徳川家ふ屬しなゝがら東照宮御旗へ敵對せし罪ゆるしがたし速に降人と成りて城をとのおつるさるべきやといたせければ城主いなほ官軍ふ屬せんふいきこのたびいこのにしてこの方をきり開て古河の方にあちゆる井伊藤堂の兵と一手になるんといふ弟なるにがしは關東方ふ味方せん

こゝく兄弟このゝゝそひに時うゝりるゞ攻まい
十分に隊伍をこゝ打へ出かまへる折しも其日
其日の八ツ時こゝう合戦もゝゞ始り志きるに大
砲を打このけるほどに城の内外いもとゞ火焔とゝり
けるべおもゝしきこといもんこのたゝ城兵ハたゝこの
いんとするあもきくもくたゞ烟ゞまぎれておちゆく
ものぞおゞりあるかくて夜九ツ時ぞゝりに
城主二百人ばかりの兵をひきゝるく一方をきりぬき
南をはしてあちゆきあるゞ關東勢も追欠ル
ばかりけり

二十二日
關東勢手生城を乗取く點檢しきるに武器
兵粮玉藥其外金銀等おほくもてあはてゝ
きりけるゝぞ

二十三日
官軍關宿に屯したる由をきゝく關東勢押寄
合戦ゝりゝにゝも官軍利なくして中田の方へ
引退きゝる

二十四日
勝に乗たる關東勢なるべ未明より軍馬を整へ

中田宿へおしよせけるに官軍も嚴重に備へて待こうけあり九時まへよりたたかひちゞまりられどもいまだ勝負さたえざりける處に大村肥後守のうぐぎりゆく官軍おほひに敗走ならるる

二十五日

官軍はやそう中田驛に陣取たり關東勢もけふはたゞゆうゝゝあゆくぞ日をくらしける

○今日信州飯山へ會津勢五百人計おしよせて尾州の兵と合戰たりしに米澤庄内ありかけて加勢の兵を出べ會津方勝利の由

○今日平尾ゆく官軍に生捕られる近藤勇を死刑に行ひ其首を京師に送る

二十六日

官軍いやそを中田に陣取居りきのふけふそとよりたのつまりし關東勢へくさりる人數い南部上杉水戸會津の兵なるべに壬生大村降參の人等都合二千七百人とぞきこえし

二十七日

關東勢評議しるいろまぐにたることたのふてなたりとと際限たるなけふの風雨をさいそひ

ふ官軍を襲撃せんいなどとの意ゝ諸將是ふ
同じくいざたゝゞば用意せよとゝく其日の午の
刻だろに中田宿ふあゝゝゝせこときをどりと
のぎたりけるゝゝふゝ風雨ちげゝゝ官軍
方向ひこの色たりけるがべール打立られども
あのふほどふとしたゝゝざりまゝ會津勢ち
二百人程射手を拵ゝくさんぐふ射立ける
間より一番鎗奥州會津の住人鹿島傳藏と
なのる風雨をゝゝ行れたゝ大身の鎗にく
藤堂の先陣へ突ゝかゝ色ゝ藤堂家の部將

山田勘右衛門なのりてのりせくたゝくたゝこのひ
しこの鹿島この杖やまさりけん忽ふ傷きたふ
を見たりたれをいゝく藤堂仁右衛門西をさして
逃出しけるこの水戸の臣内田新吾が矢ふて射
殺されたり先手の兵どる大將二人を射殺され
てなのふこのハ以て たまるべきわ色さ死にとふげ出
きれば二陣にそなゝゝ島津重一郎同主水石倉
三右衛門等人数凡二千餘人一度にどッとわゝせ
ゝ色ゝ引退くゝ小高き岡の上に
ゝのゝ精兵をそろくさんぐふ射立る色ど

重一郎はじめ死九人の者あり討死す後陣
にそなへ因州勢ナリ道をいそぎ戦ひもあるべ
敗走ありいぶやいきハ是まぐなるぞそ
中の刻ばかりに士卒まとめ引退きあるこの關
東勢にそなる手負五十餘人討死八人生捕分取
おびただしくありまるかそ

廿八日より出ハ次篇にあり〳〵近日
出板いたす〳〵

○浪華よりの来信に云閏四月七日ふみのど京都へ
還幸まし〳〵けるされども市中いさもし〳〵も
なるべたで内外商人ことにおきなひいたく
なし〳〵大筒洋鎗火藥などハよくさだまる
事にて日本人もたまぐ〳〵うかひしそ〳〵なる
べ横濱の事にめんだうなることなり御一新の
ちこのふたの事ハよこたもかなる陋習ハ石ぐ〳〵
廢せらるべし〳〵外商等まこれをのぞあり
○十七日に法國の新ミニストルよこたはふきまつ
法國の帝このことを撰ぐ日本につのしたまふ

山ちゑい現今日本ハ南北の亂あり然しゝく日本の
最あやうんぞべき産物ハあるゝ北部の領地より
出るにより此人を日本につゝゝこのゝゝふ北部
の諸侯に約して生糸と蠶種紙とあるく買
しめんこうめなり
○十八日キウシユウといふ火輪船にて五六百人の官兵
を江戸にあゝわり
○をちうといふ帆船一艘支那の香港ふ錨泊しゝり
日本の旗をたゝゝられべ日本船なるべゝ志の
船將ハ西洋人なり

○十二日出の上海の書信きのふ届たりうちに
日本雜貨の行情單一つり、香蕈百斤ふつ代、三十両
より三十二両まゝ、海參上物四十四両、次品三十三両、鮑魚
廿五両より三十一両まゝ、魷魚十二両より十六両迄、魚翅
白三十両、黑十六両ぐらゐ、蝦米十二両より十七両まゝ、
樟腦十四両より二十両、茯苓三両より四両、五倍子二両
より三両、蘇木三両ぐらゐ、杜丹皮十八両、香帶壹両より
三両まゝ、帶絲上物四両、次物二両ぐらゐ、その壹両と云ハ、
洋銀壹枚三分五厘ほどにゝく、大抵日本乃金壹両と
同程なり、

○この内病さる醫館に於て療察で死ぬ者を
ふるけ者より肺の臓ゆ三つめで紙をたたり一つい
ぐりくの骨にくまぐすぐ〜わる〜一ついうみゆ
なるくゆる〜一つい去ぐにくさ出さくなるに
なりたを

○關宿の城主久世侯の藩士南北両列ゆ分れるゆ北部
ゆ屬せる者四五十人深川伊勢崎町屋敷ゆ在ゆるに
南方屬せる藩士官軍と共ゆ去廿三日赤明深川邸ゆ來り
談判く及びゆ処終ゆ戰爭く相成り双方多負有之由

江戸浪人の檄文

天地の間、大義の名分なるものたり、余等此ゆ來れるゆ、
普く此を明にして戮力せずんばあるべからず、先ゆ我老君
政權を擧き
朝廷ゆ帰されるい深意にあることにて、外ゆい外國の交際
日々開け文明の治躰駟馬も及ぶ変能いさる勢ひにおいて、
内ゆい政令多門とあるして、統一せること能いさるの患あり、於
是自退いく侯伯の列ゆ就き衆諸侯と共ゆ、
丁君を仰ぎ、邦内互に、擬疑抗抵の心なく、戮力して萬

國と並立せんと欲せらるるなり、然らばんば、何ぞ
祖宗三百年の政柄を挙げて、軽易ふかれを帰さるんや、
志るに大變革の初頭より、一言の談事もなく却て、
疑心を以て、我を待ち、兵威を以て
宮門ふ迫り、大ふ
輦下を騒擾するに至るに、老君にい、固より我より帰されし政柄なれば、預り聞んことを欲せられし心なるに非ざるべし、畏なのごとく
幼冲の天子、上ふ在しまして、
國家の危きと累卵よりも甚だしく、傍看せられ
ざるに、自臣子の至情にたえざるや、さて再上洛しまして
善を挙げ、邪を斥け、政道公平に帰せんことを欲せらるる
先供登京の道筋、薩長らう悪意を挾て待受たる
故ふ、遂に鳥羽伏見の戦争となりしなり故ふ其節の
勅命ふ、薩長の師と戦へと仰しとは、此万人の共に知る
所、毫も疑なき也、志るに十二月以来、奉欺罔
天朝といひ、又連日錦旗ふ砲発といひ、又叛逆なること
いふことごとく、當日に考へ証跡なしし、千歳ふ垂れて、
不朽の寛罪を負いしむ、名義ハ、人間の重ずるところ
故ふ一匹夫を誅するも、猶其罪案を明らかにして、而後刑に

處さべきなり 何ぞ此寛罪を買いしめ、擧國の大兵を動こすに至るや、且我寛罪を蒙のこなるべ、弟を誅して兄を伐しめ、臣を誅して主を弑せしめ、末家をして宗家を滅さしむることを、命ぜられ、自ら失節の政を施されたるなり、凡そ

勅命の尊き所い、不偏不黨人倫ふ戻らず、天理ふ乖らざるこが爲ふ行ふずや、近頃、太政官よりの高札ふ、人ハ五倫の道を、正さべしと示さるるり、今倫理を蔑如し、名義を碩さぶること此に至るものハ、此奈人猶強梁して

勅命其手ふ成さべなり、故ふ老君ふ白して、再師を擧げ天下の爲ふ害を除くことを請ひ者なりしが、老君一切に仆け、只管ふ罪を一身ふ荷ひ、ものハ幾百万の生靈屢塗炭に苦むことを厭ひ、且ッ我一らび抗抵せば、擧國の兵端此より開砲声止む時なく、外國の測目注視するの釁隙ふ乘じ、不測の殃ひを釀さん、德川一家の成敗のこならば、皇國の浮沈と、なるんとを、畏まられるにて、東照宮の遺訓ふ、懇ふ垂戒せられしに非ずや、故ふ身佛寺ふ入り、痛く責て、恭順の義を盡し、屢歎願の使を馳せ、寸時ふ暇なく、蒼生の安堵ふ帰せんとを日夜ふ庶幾せらるるなり、然るに督府ふ訴ふるものハ、仆て通ぜば、京師（歎願せるものハ、

督府ふ通すべ〜といひ、漸進して、我城下ふ迫り、前件の
寛罪を負いしむるふ至る今寛典ふ處をといふとも、固より
寛罪を負いもあて、何ぞ寛典ふあらんや、臣子の情
忍さるものなれども、老君愈恭順せる事、人々に喩し、
戸々ふ説き、我命を用ゐざる事ば、即チ我身ふ及ぼすべ
かりといふ事ふ至りて、泣血止むことを得ば、命を奉ず
といへども、此寛何ぞ雪がざるを得んや、是我輩脱耤の挙、
止むことを得ざる所なり、必ス老君の譴責ふあらんを知ること
雖、大義名分天地古今自ラ己むべからざれば、相共ふ泉下
期し仏罪を謝せんのみ、獨りのみ、此太平の久き先を

祭り、老を養ひ、兒孫繁延兵火の難ふ逢ざるものハ、此
誰が德澤ぞや、島津氏毛利氏と雖、同じく其恩ふ沐浴
せしにあらずや、況や其他列侯譜代の者、亦何の心ぞや、
縱我衰弱せりとも、大義名分の間、衰弱あることなる事ば、
何ぞ正論讜議して、此寛を
朝廷ふ訴ふるのみなるき事、只仙臺侯首ら〜て、義を唱へ、
米澤侯を始め、奥羽の諸侯此ふ應じ、會津莊内ホの士
民義心確乎として、動かざ、北越諸侯も亦連盟して義を
守る、ときて、然れども、仙臺の上書ハ、擁塞して達せざ、會津
莊内等ハ、均しく寛罪を免ぜ、嗚呼天地冥々たる、何ぞ其

此ふ至るや、我ホ微力なりと雖、大義名分の為に死し、
主家の寃罪を雪ぎ、万世の下、綱常を維持せんとするの赤心
なるのみ、万國の公法ある伸寃の師たるにあらざるや、若余輩
の議を以て公なりとするの者あらば、日月の照覧する処、邦内
い論なし、此を萬國の公議ふ附して、其至當を決せべし、
これ余輩 天地ふ誓て布告する所なり

脱藉徳川臣中

四月十七日

○選録上海新報

蘇州の奉行曾中堂といふ人、上海ふきたりて西洋人と議して
鉄路を造りて蒸氣車ふて蘇州と上海の間荷物の運送
人の往來を便利にせんと入止たる此事の成不成ハ未可知と
いへども蒸氣車の有益なる事ハ支那にきたりて頑固なる國なれば小民どもさまざまの異論を
おこし、とかく疑惑を抱て是を作る事をよろこばざるべし
英國ふてはじめて蒸氣車を工夫しいだしたる時西の海邊より
東の港まで直ふ鉄路をたてんと世に其間ふ一の大
城ありて其城主ハこれをゆるさず是ふ依てやむなを得
ずして三十里のあなたをしてたてしめさて鉄路成
就せし後わづかに一年餘にして城主ハ民もその便利

にしく太益なるものをうしはるぐ後悔せり依く鐵
路を法るものをよびよせくこの地鐵路をまうけぐ造り
なほしくこの城下を法らぬれて海岸に達せんと欲ひ
れどもその鐵路師も亦こを恐をゆるさざりしとぞこれい今
より四十餘年前の事にして英國いすでに文明なる風
俗となりし頃なれども猶かくのごく偏固なる城主あり

○選録煙臺新報

支那國北邊の捻匪といふ賊徒八萬人あり紅衣紅巾ふしく
眉を赤そめくり四月五日その前軍なる騎馬隊まて天津城
の十四里外まで進ばしるに支那國主あほひふあどろき

官兵を發してこれを伐と用意せり天津ふゐる英人も兵船
そなへく敵をふせぐの支度をなくり六日九ツ半ごろ俄ふ郷
民ども群をなして東南の方へ逃走りられば何事なるぞと
問ふ賊軍ならでにこの世きこれりとて大せさきまれば内外士商
ごもはなはだ驚慌せり老幼家財を船ふのせて紫竹林と
いふ處の邊へうちのく人あほし北京より李鴻章左宗棠
といふ二人の大將ふ命じて大兵をひきゐて天津の四方を
警衛せり此時の風説ふいま來る處の賊軍いたぶ先手の
勢ぞりにく後軍い猶いまだ到ぐといへりある英人馬ふ
のりて賊軍のそなへくる處ちくのぬれてゐるに五六百人紅

衣紅巾まとく馬ふ騎まに小鎗を持て調練をなすなり
らぞ夜ふかりて天津の南をえらぶ屯べ火光天をこがす
是ふ依て城の内外とにとさらに厳重ふ警衛せりかくて八日
の朝ふいたりて賊軍たちまちいづくとなくふげさりときてく
李鴻章左宗棠と美國領事官法國領事官とともに滿州の
歩兵をひきゐるく南方の村里ふ出て百姓共ふ問ふ捻匪ども十人
二十人そこのちの民家ふいりとき刀をふるひ又ふ鎗をたるもて人を
おどして金銀をうばひとり昨夜村落ふ火をつけふげうせうと咎
し或人の曰捻賊此時天津をさること三十里の処ふ屯集せる人数
八万人餘あて婦女ふ示ふる馬ふのり刀を帯たりとぞ

第七篇

慶應四年閏四月廿八日

○閏四月十六日淺草藏前ふ有貼帖

檄因循諸君

先頃歎願之三ケ條於朝廷御評議可有之旨ふる參謀衆上京之由諸君其吾左右
御待之様子ふ相伺ヤハ右ハ軍吏之いろはとる旗下之人心を緩
むるの術ふ可有之其證ふ御裁許之節哀訴歎願等斷
然不聞召確乎不拔と被仰渡其言未終ふ關八州駿遠
參之所望萬ふ一ふ被行中間敷いで徳川氏有功無罪也
何ぞ歎訴ふ及ん哉諸君此差別御定論之上御奮發を祈

中は御同列にして計策のいろはに陷被成ゆへ残念に
存ゆ依之以檄文中進ゆ

○北國より出たる檄文

このたび關東へ軍勢發向いたしゆゑ是より天下の
みだれと相成佛法すたびいたすべく哉と悲歎かぎり
なくは其譯ハ今度天子を掠め奸邪むほんを企
德川家をほろぼし天下をとるべきひらるけいたるべく
に實ふゆゑに大事ふゆゑ薩長ハ佛法
ふ信仰あるゆゑ淨土真宗をひろめ

いたし異國人よりきりすとの邪法をうけたぎゆ
佛敵ふまぎれこまるくゆそれに一味いたゆめハ
皆く佛敵まそたとへ今生ふく一旦栄ゆると雖
阿鼻地獄の罪人と萬一奸邪の藩勢國ふはびこり
佛法破滅ふ及びきりしたん宗門世にひろまり日本
國中魔道ふ落入ゆゑ其時に至り歎かわしむ其
其このひさしにあるべく昔開山親鸞聖人
をはじめ奉り御代々の善智識方佛法の為ふハ
身命を惜たまひ顯如聖人ハ御自身ふ忍辱乃
鎧をめされ弥陀の利劍をもつて佛敵を降伏

たのもしきれい例もこゝまにあり今日佛恩報謝乃
たゝめ身命をなげうつべき時来まり依て門徒中
心をこのゝを佛敵と定んためは二念なく打取りゝ中は
萬一佛敵のこゝあふ命をうしゝ者ひとゝも浄土を
引接さゝにうゝてゞひあるべきのゝぎるものなり

四月　　門徒中

○

第三篇ふ十三日ふ真鶴へ蒸氣船三艘着岸せ
とのゝうのゝ藩小田原ゝりきたれる人のはなしに
きけば三百石積ぐらゐの船二艘にて房州の方
ゝりきたりゝ由ゝその上陸せゝ脱走の兵小田原
より三羅山へあつまりしゝのそれより沼津へ又甲
府の方へゆきゝとゝいふ
○このゝ浦賀ゝも兵卒ゝ滞留ゝをるゝと
風聞にゝいづくのまの兵なや
○きのふけふのうちに小田原にて一合戦ゝあるべきはし
ゝいきする者あれども誠ふそのゝまゝなりしゝもきこえず
○横濱にゝとこのゝあるゝ下番とゝふゝの防門又い
たゝゝぐんの番をしゝくゝあるゝしゝのゝ二十日のゝのさ

あらこのに百五十人だてのうにぎうせ〜とぞいづく〜
いき〜ふこのうふん給金のそくるきをいたどりて
にげ〜たるべ〜

○二十一日ふ官軍の兵士五百人だろう横濱へいりきる
まりこの港の警衛のためたりともいひ又北國へ
進發たるべ〜らもいろ

○このごろ房總の合戰ふ疵をうけ〜官兵を
横濱へ送りきるまろう英國の醫士ウイリスを招き
て修文館まく療治をせ〜この臂をかるそきり
うたるもあり御ものとうし〜きりたるもたるも

なりまるを打こるまるを砲丸をほりいぶるもあり
るる人そぶ後にきそるくあり〜とたん

○二十二日金銀たるぶびふ銅錢の價直あほひに
なぶまろくそ〜きるもはあふまるく人のきりたる
るそれバたにいぶきそば

○英人重井鋏之助このごろ新聞紙を出〜ろと
きけりいまぶるぶといぶどるさぶあて奇談珍說ゐる
べ〜

○ベーリイの萬國新聞紙もこのごろ十一篇を出板
せり

○江戸と横濱のかゝりひ蒸氣船ひさしくやすみゐたりしがこの廿四日よりまた往來するとぞ横濱ハ鹿島屋にて船の切手をうり江戸ハ永代乃藤棚にて賣るとぞ

○二十三日ふらんすの博覽會へゆきし吉田氏かゝりきたれり清水卯三郎ハ十日もおられてかへるべしといふ

○

譯錄香港新聞

四月廿七日廣東省城の楊某といふものの鹽商人なりけるこの頃德縣の龍潭渡といふ處を船のとまりなるに忽然としてにわかに大風ふきおこり大雨そゝぐごとくなりければ船人ども狼狽ひとしくまごひて船をとゞめんとすれども巨浪そこの乃如くにあるのみなる外の船ゐ打あらてて二艘ともに覆沒したりけるもむべし搭客四十餘人たゞいとゝなる溺斃せしにこの楊某なるものハからくして命だけを得て省城にかへりきたりてかくのごとくこゝぞさくに牧ものの水濱ふたりし人家樹木等ことごとく風雨ふ打碎

きりとぞ或人の説ふいらの時斷尾龍こゝを經過し故
ふかく異常の風勢なりしなりんと
支那人のいふく竜たの鬼だのといふ怪談をこのむ
なりこれはその國の學風よりしこのらぬゆえ道
理にくらきなりめるなるべし
○二十二日なるしまの兵をこゞさきたるの兵つゞき四百
五十人かゞたのことといふあるこのの蒸氣商船へ
のりて北國征伐のために横濱より出帆せんとし
をなめりこののをふすとるそのをゆるさゞこと
よりてのりこをたるいつはのこらはふたゝび上陸し

たりとまんこれハ局外中立の掟なるふよりて
あるべし
日本の萬國と和親して世界上に日本あるこをを
なのぐきたるハあめりこのの功なり些の數を
德川家よりをいふらんをまこ為紀をものに応ひ
とりて考こまこまひみこのといぎりすをこま
なくむつまくしあめりこのにそいころに
こをいぐきていい紀どりをるなるべし
○同日あほきのといふいぎりすの蒸氣商船と官軍
の兵四百人ばこのの浪華より着岸しこりしが

いぎりすのそふするそのゆをきく二十三日早朝
その船を官へさうあぐりたりとなんこれも局外中立
の掟にそむく思ふべしさてふねどめはぐのひ
きんをいぐるすいらの船をばこのつすまでなど風
聞なり

慶應四年戊辰五月二日

○出羽山形より來信の寫

昨五日筑州の兵士九十六人岩根と申處より入込當國
光明寺へ止宿いたし翌六日又こ五十人ばかり到着致且又
當地市中嚴重に御警衛ふ相成申ふく付庄内勢ゆも
ことを不得西在へ引退申ふ七日早朝筑州并に山形の軍
勢五百五六十人ばかり寒川江と申處へ操出ふ相成申ふ當地
の俠客山形金兵衛なるびふ留吉兩人子分七十人餘引卒
仕加勢いたしふ由何も鎗を引提雄く數出立ふとの事に
御坐ふ右く付今ゆも放火に可相成と市中一同驚動仕家

財等持運び中は只今此状相認居る處北の方ふ火の手
相見中は由長崎驛邊ふは趣人々中居る矢目村と中
所も大半燒失々相成は由義は先ハ取急右大變之次第
中上ハ以上

国四月八日四半時

山形本店より

○横濱近事

この月九日ふきそくばるまたとのひ〜官軍の兵士
よりほどふたぐをおひたるものは〜がよこそまり
きそうくのぎりすの醫士ウイルリスの療治をうけて

次第に全快ハおりもり

○

○ようそなの却りごちたるきのと一のきうど貳十軒
ばかり戸を志めて家業を安めり集會所のみは三人
かゝめこゝ生たるゆゑ外國人の手をかりて裁判
所へ訴くこの方三人のうちをちやくいぐさせんゆゑ
はのうごとなるべし

○ちかごろ狗の疫ちまたに多し人も出ることを
○ことし月ちがめのうらなりのせんべいどの
ちんにうのふにうらなりうりとうへうりことに
はなはだそのかしらぶんのものやけのたるぬこと
あるべしゆゑちがをきらひといつりそれひとのない
ぐほうといふ
○十二日のこと江戸の山王ふこりのなる脱走人の
かしらまつやといふ人八王子にゆき千人同心ふこのあ
ひだにかくのびしらば千人の内より百人の精兵我
あらんとぶしてきたりあげゆゑ何時にてもねん

みのうちべきなりとなりこのび官軍にまつぶひ
はをゆるしてかつりとぞ十五六日のことと
なるべし
○二十三日ふらんすの博覽會よりかつりきたりし
吉田といふ人のはなしに天竺のせのろんをこほし
時ちかい佛誕の地なれば所々案内者をたのみて
その寺にいたりて釋迦の像をながめたるすべて
ゆるさぬ日本人ハ佛を信ずるよりをひろくいろくなる
すのしまれば男ばかり僧ごとかぎをもちいぞく扉
にのけて見せたり像のねほきさハ壹丈三四尺ばかり

にく蓮華の上に結跏して手をひざにのせる
さゑ日本ゐなる地藏のかゝるに似ゝ頭も螺髮さい
にゝらび顏にも手足にも箔をおしたるさゝ我の
まゝふたゝびそゝる木像い現在日本の禪僧の形に
よくにゝりたゞまゝもひざすくゝ坐そゝりゝゝる
みちゐく船人のうたふ歌のふしをきけバ日本の
禪宗のだゝまずのこゝちするゐむのゝたんのうに
ゝくにゝるものたゝしとぞ
○支那ゝゝも博覽會にゆきゝ者ゝり又ふゝんを
人にく支那の貨物をこのひあつめて博覽會に

出しゝたるものゝしゝのいづれもえるゐたゝるゝの
たゝり漆器磁器をおもにゝちゆきゝそのうち三四分
ハ日本の物をゝりまゞゝて出せりとぞ
○ふゝんゝす博覽會にく萬國ゝり抽めひくゐ
その國ゝの貨物を持出せゝ中にゝうやい玉石の類
はゐゐゞおほくゝくゝその色のさゐぐゝたりてゝうく
しきゝこゝ細工のゝたるゐいゝ實に目をおどろかせり
鐘錶いすゐゐるにおゐゐ物なゝゝされどゝゝうげゐ
機械いゞりすをめゞく世界第一とすべゝさて日本
ゝゝの博覽會にく七大國のゝちゝ数ゐいゐ

たりそれい國こより鑑定家を出せるがその評ふ
ふをうくかくハ定しなりうれにとりて法國王より
ガランプリーといふものをたまはりしとゝいへりガラン
い大プリーハ價といふ心なり厚賞なるい大褒美
なりどいハ意味なるべしその形いまるく洋銀のふー
大なるほどあるくたつきい一分なり金むくのそなりて
にていまの法國王の像を鑄付たり三代目なるべれ
ゐんなり裏ふ日本全國へと云文なりあほくの國こより
たのまりたるなのに七國へこれをたまひしがその
うちにいりうるこそ日本の面目なりきも

○四月八日の夜はこゝに火災なり外國人の家も
ゆほく燒亡せりとそこれい越後の新潟の人のの
ごうなり

○桑名侯なりくびにその家臣九十五人と會津侯
家老と平士二十五人なりをうの家老そのほかの女中
なりくにて百人餘やのひのなりごろひろにのり
てゝこなるこのこぎいろぐそのお移にそこゝに
法紀二十三日のなりそゝれはりに新潟ふ着岸せー
こゝぞ

○四月のはゝめこ移なり新潟はなりそゝさるゝーく

たのりて會津その外諸藩の兵士にまつそこにたむろしゐるよりまつ脱走の歩兵千二百人ばかり水原よりゆいりこへいりこしといへり

○水戸の家臣市川三左衛門、佐藤圖書、木森典膳朝比奈孫三郎等手勢六百人餘をひきつれ四月二十日に新潟ゆいりきたりて寺々に止宿せり

○水戸會津その外諸藩の兵ちりぢりゆ脱走歩兵等おひく信州へ人数ゆりだしべきの風説あり

○甲府の城い水野氏二百人ばかりの兵にてけい衛せり掛川よりも百五十人奥平氏も百五十人ばかりの人数をひきゐて水野氏をたすけてとも に甲府城をまもりもと信州の真田氏なれ城をまもりしが北部の兵ゆるのに信州ゆ襲入の報をきいておどろきたちさりしとぞ

○

うくのそよみて人はまつ〳〵る
こゝろひとしのぶのをゝ結ほとぎす　さゝら

そのゝまくさくこゝいきこゆや

○新聞紙ばかりたゞ實説をのゝしるく出板すべきのみなりきれども遠境の事なゝどハ一〻その確否をたゞさんとするうちに月日もそゞろあきく世間の人々もとゝなりたらんハ陳腐のむとのゝかろとなりてつまらぬさまバうゝ少しゝハ實事にあひたりとも いづくゝふてうるゆのはぐうしゝごとくとんまつこのたのゝとゆやかゝゆひどこのまゝしるそのの人の口うゝ出くゝ結人ゝの耳にいるハやゝづく拾まゝが新聞ふぞたりるいのたとなれば則そゝみくそのつゆあまゝべなり

羽州合戦之事

閏四月二日羽州庄内の浪人二千五百餘人ふゝく同國仁田原驛の墓といふ處ふ陣取寒川江柴橋一人數をつらしし官軍より附置たる番兵をおひたゝしひ舊領を取返し翌三日溝延藏増邊まで拂しるゝ先ゝるに天童の城主織田氏よりる人數を操出ゝ最上川を隔て大小砲を打合けるがそかくゝきいくさにもなふさりる處にいづゝ迄の手よりや火矢をかけうゝ窪目村より燒出ゝて溝延藏増邊一圓にそゝたゞりけまゝべ火焔天に漲く

赫たること白晝の如し此勢に乗じて酒井勢夜の
中に最上川を渡りわたりて翌日の早天に火を天
童城下に亂入し城の前後なる町家に火をこのもの
時の聲をどっとあげたりけるに城内の小城なり
人数いすくなし たまひとりも ふせとまりて敵をふせ
がんとせるものなく拙をとりすてく我先
にとあちゆきたりふしに東風さげしうをまれを
猛火天をそのぶし黒煙地を拙ふさく拙そろしたちと
いろんかさなり 酒井勢い勝に乗てさぞで城内に
ふれいりたまが城主も今いたりたるぞ催十三騎を
ひきつれ大手より搦手のびいでるに溝延より
引返せる味方の勢にゆきあひて山縣さして拙ちゆき
けるに酒井勢三十騎ばかりにて追驅すれば織田方そ
軍師とたのまれる吉田大八あとをまもり一人もあぶぎ
たるものひきもるがかたるをずして東山の方へ逃げ出るに
酒井勢の大将なる敵なるぞゆきとそ出げしく
追掛けたまへば大八三四度も引返して血戰し敵の首五拾
切て拙をとり ちぐらをを打ふりく拙ちゆきるいめざま
かりける剛の者なり此日の合戰に双方ともて拙ひ討死
へ案外すくなかりきるこそさるほどに酒井勢い四日の

夕刻ふ天童を乗取てその日ほひ破竹のごとくに
此機會に乗じて山縣の城をも一揉ふとつぶせとて勇
進だるその折節羽州第一の俠客とうたわれる左澤小
文治、子分三百餘人を引連て酒井勢へぞ加はりける
五日の巳の刻だるに酒井勢へ三千餘人天童の城外にて
勢揃しく隊伍をくづさずやまごのごとくにて
押しよせる是を聞く北陸道の鎮撫使澤三位殿より
御下知ふく筑州の兵士百五十餘人ならびに薩長の兵を
はらしてやまごの危急をすくはれば城の四方に
陣を張て厳重ぞ固たりける是ふ依て酒井勢へ城の

西手なる山よせに引退て陣取るが七日の四ツ時だるに山縣勢なりびふ諸州の援兵つごふ千三百餘人ふて寒川江邊へくりいだして敵をふらんでひこのくりかる處に山縣の俠客金兵衛、留吉、子分各七十餘人をひきつれ加勢ふぞまわりふ出立鎗鉄砲をたづさへく加勢ふぞまわりるかくて其日の八ツさがりより合戦はじまり雄雄いまだ決せざりる處ふいだるの故とし筑州ならびに薩長の兵ふたりに陣掃しく引退けばバ山縣の城主さのなりさまを見てあほいふ如どろき急に馬を下りをぬいで降参しるとけふの師ふ山縣の勢討死十

四人深手六人酒井勢ハ手疵只一人とぞきこえしさて
も酒井勢ハ勝に乗じて官軍の屯ぬる長泥といふ
ところあり〻せ八日の早朝より たこのひるがこてあて
も勝利のよし〻庄内にてぬるちこのめどしこの
よしを聞て羨しくやおもひきん五百人ばかり脱走
しく此内ゆゑ加ゐる酒井勢ハまつ〻いかゐひさうん
なりまれバいざや上山に拙〻せて一戦せんといきこ
ちこんぐ其用意をぞしたりける
澤三位殿より御下知ゆく仙臺より三百五十人黒
田より二百人米澤より百五十人薩長より三百人を

上山へ援兵とし〻ゆくれきる是によりて酒
井勢も、つまゞ容易ゆ攻入ざるめよ〻猶其結末
をきゝんと欲バこの次に出板をゐるべし

○

閏四月二十六日八王子よりの來信

揖別後久不申之候ゆ弥御清適奉祝ゆ云々廿日十一日
夜徳川家脉者〻士〻〻〻等甲府城取戻度心組〻
農商打交人數五百人餘八王子寺驛へ到着仕ゆ武
器等携ゆ者無之由兼而奮縁義有之候ハ八王子千人隊
とゐる屠ゆ掛合る驛内禪院五ケ寺借受〻ゐ成右人數

止宿致日〻千人隊〻掛合致居候〻先達ゟ　王臣〻
お屬〻候〻京師出有〻〻故後難〻程も難計趣〻
兼光不仕〻者も三四分も有之又徳川家〻屬後と中族
有〻又〻脱走〻者も有之甚混乱〻至〻変出
内弥徳川家〻左胆〻致〻お極〻〻府　總督府〻訳〻
為千人隊長石坂弥次右衛門切腹致〻由〻変出
専合戦〻用意ゟ已致〻変脱走方武器等不足〻付
從来千人隊所〻鉄砲五十挺お渡〻且又軍用金二千
両才覚致出〻中由〻驛吏共周旋致居〻変廿日
九ツ時頃尾州兵士四十人計日野驛〻陣取〻付脱

走方并〻千人隊急速人数操出〻既〻戦争〻不及之場〻
多賀上總介出張〻利害得失委細〻説破致遂〻和
議〻お成廿二日九時頃ゟ脱走方人数追〻江戸表〻引取〻
お成中〻諸方〻右様〻事件多有〻不安心〻世〻
中〻〻〻現今横濱表形勢如何〻〻〻意大利國より
蚕種紙商人多渡来仕〻由當年〻外國人引取直段大約
如何程位〻〻〻〻〻〻八王子近在〻大概七八分〻夏
蠶〻種子〻お成〻品〻甚稀少〻〻〻春蚕も〻今繭〻お
来中〻〻商人蠶連紙前取引本部百枚〻付二百五十両以
上〻〻〻先〻任鴻便近況〻何致草〻如〻〻〻〻頓首

閏四月二十四日　　某姓　某名

○

高力主計頭といふ人江戸の乱を避てその妻を上野のくに
なる知行所へ送られしが夏ふかくなりぬれば
あつのきものを妻めかせへあるべく菖蒲籠にいれて牛
込のもとより船にのせくだしやるに武士二人入來て
船中の荷物をあらためさせけるを市中の者あつまり
て竹鎗をもてそのぬすびと二人をつきころしぬ

○

先日相州真鶴へ上陸せしは江戸脱走の士なるべし遊撃
隊なるよしその内にあるべきたる人は林肥後守の
子林昌之助といふ人ほか人数二百十人尾州へ攻いらん
その心組にて沼津をこほりなるを城主水野出羽守が
されをさへぬきて總督府へ此よしをとどけられる
に其方にあづけおくこのよしなるを迎ひ甲州の黒駒村
といふ處ふとりにもおきぬ

○

このごろ前内府殿　天朝の御疑念ありて滝城より
かへらせ給ふの風聞ありそれにつき三條殿勅使にて下
たまふのよし諸侯より白寛表さげしめ給ふ

このりくをば内府殿ニ心ゝなきこと　天意かつうせゞ
なるべゝ

○

閏四月二十七日外國事務總督東久世殿ならびに判
事寺島氏江戸へ御のぼりしは是い築地の外國人
居留地を受取ゆゑのなるべゝ

○

九條殿勅使とゝて陸奥へ下たまひゝがらのぞろ江
戸へいらせらるゝきの風聞なり

慶應四年戊辰五月十日

このころ江戸の友人より両總合戦の實記をおくり
きたりこれい其いくさに出たたるひとる人のうゞ
うら書ゝたりといとり初篇に載たる舟橋合戦
こいおほいのたゞなりのれい閏四月六日に江戸より
送来たる書狀ふうりてこのたのせたるなり其書狀い
おろく世間ふ流布ゝたるものとゝえて其後三人の
同文の寫を送来たりされどあの説ふい江戸脱走方の
兵おほいふ勝る事にいとり其後日蓮宗法ぼうず
行德ふりきたりゝこのこゝろゝ日ぐさ初篇をえ

て志賀へうせ給ひしなるとて諸人へ告その實説
をきゝの毎月〳〵とたづゝ〳〵ふらせ給れど是迄
ものゝ告ぬつまびらかのなふねどたゝのらしるれば是れ
をもうちまゝ〳〵出に出るに
四月のはじめより和ひく江戸を脱走する人数多くて
武器兵糧など用意して両總の間舟橋邊ふ屯集せり
同月晦日ころ八幡をかゝめたる官軍の陣へきたりて應
接せ〳〵ゞ之〳〵官兵ふかゝのひて兵端をひらくこのんと
するの意あり官軍より源内府さふすでに水府退蟄
し〳〵天兵ふ抗せゞ謝罪恭順いふく深ときく志をも
ちてその臣下たる汝輩君臣の道をきゝぎるべゝ
り〳〵此義分明の上ハ速ふ兵器を　天朝へわたし
たてまつるべきのむねひろせ〳〵にいろるもかしと
まうぬ但之迄ゝのこふく返答ゝ抑ゝ二三日
の間猶豫たまゝるべ〳〵ゝて引ゝれけるが国四月二日の
午の刻すゞるこゝ為きゝ何の沙汰なきのをれば約定
のごとゝ武器相渡さるゝべ〳〵しめ〳〵違約ふ和ひくい兵
威をもゝてゝうけとるべきの間そのむね覚悟なるべきゝ
と官軍ゝうひひろ〳〵きるにそれゝうつねゝ爭端
をひらきその夜の子刻ゝゞりふ浪士二百人ばかり八

幡へ和〜ゝ砲發〜たりるに官軍へ不意をうゝれて兵隊をそのるにいとまあらぶ打ちこちゝをぞれて
きりむもそび〜〜が浪士二三十人にて備前の藩士西岡
真三郎原田作左衛門本荘周平を中にとりこめいけ
どゝんとのこあひるにさすがゝ強なる三人も多勢に
無勢なれば手ふかのゝ〜そなえたりけるがゆうく一方
をきりぬきて陣所へかつりるとぞ官兵いさぐ備前
一手の兵のこふくるめたるのひあるを二時ばかりるは
三日五ツ時ゝ官軍市河へ陣を轉じたりるに四時過
とあぼ〜紀ゝ浪士方三大隊をゝりいぐ〜市川へ和〜

ゝ世たりれば官軍にもまちまうけるゝとなるべ
やがて人数をゝりいぐ〜たり叛官軍をそい昨夜使者
をゝりて事の仔細を江戸大總督府へ注進ゝりるに
いそぐ援兵をゝらすべき旨御下知ありて市河口より
ハ藤堂黒田大村の兵雲霞のごゝく和〜ゝする海路か
ハ薩長の兵川舟ふゝりの船をおゝたてくいそぐせゝる
ほどにその日の九ツさがりゝ舟橋驛のゝゝてゝる獵師
町ふ着岸〜ゝさて海陸の官軍一度ふぐゝとゝれを
たのぶりたりるゝ浪士方ハ前後ふ大軍を引受てのゝん
ともするゝたゝるべ隊伍をゝぐゝあゝくふゝあれ

ほういぶ〜けるがすがまも なくこちらくる官軍をれ
べらるるものはるらぶ おちう〜からうどを切ぬけるも
手疵おそぬいきうるを八ッすぎとあぶ〜紀ろ浪士
方一人二人ぼ〜あちこちうあつまりて驛外あて勢揃
しるるお兵を失ふる七十餘人とぞきこえ〜扨あろ
の人家ゐ火をこのもりそのひまにふげのびるが東城
さ〜く抜ちゆ紀ものさるほどゐ官軍あてい舟橋驛の
人家を一〜探索ゐり〜ゐ浪士方ひとりも残ゐるものい
なこのうられぞ也かを是をるこのやあるとをみて
浪士方の止宿せ〜家〜に火をこのもりさせ且又驛外
の祠ふ大砲をうちこませまるこが一人ぶふ志のびゐ
たるこのを〜その夜い新宿まぞ志りぞ紀て陣取
ける
四日浪士い東金まるい加納山へ抜ちゆ紀そこのなろう
にこむろ〜ゐる脱走人と一をふ志ろるとぞ扨も
官軍ゐていきのふ討死志ろる者の死骸をとりるづけ
舟橋驛外志ろる自玄院といふ寺に埋葬〜それろう中
山寺ふ入〜分捕の品を黙検るゐ薩州のを〜洋鎗二十
百挺備前へ火鎗三百三十七挺大砲二丁佐土原黒田大村
こをなのの〜分捕抜ほく〜なり〜とぞけふ八幡ふ陣

を轉せりさてもなりゆきあちこちよりこぶれくたるのひゝ中に江戸小石川のたのゆゑゞゝとゐるとの臆上ふ丸瀧をうけく歩行も自由ならぶ野中ふ打卧ぬるを朋友二人ゆくこゝをたすまん舟橋ちりたるところまぐみげたりしに官兵すでふちづききれぬやむるをなびそのを物ひを麥畑の中よりくしおきく東の方へあちゆきゝゝごけゝゝも官兵の歩卒ゝゝをさゞゝいゞゝてゝ人ゝにつまりて鉄砲をうちこのもなどゝくそそいふをつけく首をねぢきりてすてふけるそぞ

五日官軍いけふも八幡ふ留陣なりゝゝが軍議まちくにくいまゞ一決せざるの處ゝふ脱走の士屯集ゝるのよゝ風聞ありそれば渠が羽翼の不成うちふ此勢ふ乘じく早く朝敵をたひらげ上ハ震襟をやすんじたてまつり下ハ萬民の困苦を除くべきもりくく各部各隊の將卒いづもそのの用意をぞまゝもりける

六日官軍ハ雲霞のごとく家くの紋付たる旗をもゝて隊伍をそゞそゞ整く堂ゝとくりいゞゝるゞ黄昏ぞりに毛見川へぞ着ゝるる

七日昨夜細作をいきて敵の動静をさぐらせるに
一群の浪士隊八幡ふ屯したるよし報じられべしとい
さぶめく舟橋ふ抑もちきたりし殘兵どもなるべしいぎ
きらぶべ彼が不意を抑そめくべしとて鑾ふ
薩長たらぶびふ藤堂の兵たるを抑そしと待掛て
一度ふごうとわしらせられい浪士方一たまりもあまらぶ
さんぐふなりて濱邊を南へ抑ちめられる備前佐土原
筑州の兵もひきたらぶくわしきりまるほとふ浪士
五井ふもたまり得び姉崎まで抑ちめびこうこの間
五里ばかりの処浪士いたちにくきりむすび火花

をちらしてたたかふこと凡三時ばかりとぞさてもも浪士
方い姉崎へ去りぞひて去るに脱走の兵士屯しゆくる
と一手ふなりて敵をふせぐんと用意したりるをり也
官軍にもふわしらせ四方ふより時のとき声をあげて大砲
をうちこのもりければ浪士方い蜘蛛の子をちらしたがごく
ちりぐふなりてふまぐらせるぶふこぶまりて勇戦し
二百餘人討死なりさてもいさい七ツさがりにく
ちぶまりければ諸家の軍兵姉崎ふ抑つまりて一宿し
たりるこ
八日きのふ敗走の浪士方い木更津へおちあつまりる

こゝに、又真利谷の真如寺ゟ江戸脱走の士八百人計り
屯集し、そゝぐのち義軍隊と称せるのおりもれ細作
かつりきゝ報じ来る已び薩長ハ木更津にむかひ
備前藤堂ハ真如寺ゟむかひる
木更津真如寺両處の戦争勝敗及び委細の事件ハ
第十一篇ふたゝびべ〜

KS.ASOM